

## 「プロレスを知る・楽しむ・考える本」についてのアンケート結果（回答数 25）

「プロレスを知る・楽しむ・考える本」は岡村正史が2010年11月13日に東京・葛飾区立中央図書館にて講演会を行った際に図書館友の会の要請に応じて作成したブックリストである。プロ文研では、このブックリストをもとにプロレス文化本に関するアンケートを実施し、ここにその結果を発表するものである。

締め切り後、研究会開催前に届いた回答を加えたため、2月5日の研究会で発表した結果とは若干異なっています。

1. 岡村正史著作「A～F」、岡村正史が選んだ40冊「1～40」、補遺5冊「補1～補5」の計51冊に関して、読んだ作品にすべてを記入して下さい。また、読んだ冊数を記入して下さい。

囲み数字は「読んだ」と回答した数。 読んだ冊数の平均 17.4 冊

- A 『知的プロレス論のすすめ』 エスエル出版 1989 14
- B 『日本プロレス学宣言』 現代書館 1991 15
- C 『世紀末にリアット』 エスエル出版 1994 13
- D 『超時代的プロレス闘論』 三一書房 1998 10
- E 『力道山と日本人』 青弓社 2002 17
- F 『力道山』 ミネルヴァ書房 2008 23
- 1. 『神話作用』 ロラン・バルト、現代思潮社、1967 9
- 2. 『もう一つの昭和史 深層海流の男・力道山』 牛島秀彦、毎日新聞社、1978 9
- 3. 『私、プロレスの味方です』 村松友視、情報センター出版局、1980 21
- 4. 『ファイター 評伝アントニオ猪木』 村松友視、情報センター出版局、1982 9
- 5. 『四角いジャングルブック』 村松友視・小野好恵、冬樹社、1982 7
- 6. 『馬場派プロレス宣言』 栃内良、白夜書房、1982 6
- 7. 『激突！馬場派VS猪木派』 群雄社出版、1983 3
- 8. 『力道山以前の力道山たち』 小島貞二、三一書房、1983 7
- 9. 『世紀末文化考 アントニオ猪木に関する倒錯的試論』 板坂剛、先鋭疾風社、1984 10
- 10. 『門茂男のザ・プロレス 力道山の真実』 門茂男、角川書店、1985 8
- 11. 『ケーフェイ』 佐山サトル、星雲社、1985 14
- 12. 『君は力道山を見たか』 吉村義雄、飛鳥出版、1985 10
- 13. 『仕事師たちの哀歌（エレジー）』 夢枕獏、集英社、1989 7
- 14. 『お父さんのバックドロップ』 中島らも、学習研究社、1989 10
- 15. 『邪推するたのしみ』 井上章一、福武書店、1989 3
- 16. 『異端の小国 小人プロレスの世界』 高部雨市、現代書館、1990 8
- 17. 『プロレス少女伝説』 井田真木子、かのう出版、1990 10
- 18. 『欲望のメディア』 猪瀬直樹、小学館、1990 6
- 19. 『大学デビューのための哲学』 入不二基義ほか、星雲社、1992 4
- 20. 『プロレス社会学』 マイケル・R・ポール、同文館出版、1993 11
- 21. 『汚れた守護天使』 リザ・ゴディ、早川書房、1993 1
- 22. 『プロレス観戦学入門 必殺技の方程式』 川村卓、三一書房、1994 7
- 23. 『巨怪伝 正力松太郎と影武者たちの一世紀』 佐野真一、文藝春秋、1994 5
- 24. 『16文の熱闘人生』 ジャイアント馬場、東京新聞出版局、1994 5
- 25. 『日本プロレス全史』 ベースボール・マガジン社編、ベースボールマガジン社、1995 11
- 26. 『もう一人の力道山』 李淳駟、小学館、1996 11

27. 『民間学事典・事項編』鹿野正直ほか編、三省堂、1997
28. 『猪木寛至自伝』猪木寛至、新潮社、1998 [12]
29. 『在日 という生き方』朴一、講談社、1999 [1]
30. 『女子プロレス民俗誌』亀井好恵、雄山閣出版、2000 [12]
31. 『東京アンダーワールド』ロバート・ホワイティング、角川書店、2000 [6]
32. 『流血の魔術 最強の演技』ミスタ - 高橋、講談社、2001 [18]
33. 『フレッド・ブラッシー自伝』クラッシー フレディー・ブラッシーほか、エンターブレイン、2003 [7]
34. 『興行界の顔役』猪野健治、筑摩書房、2004 [3]
35. 『金正日と高英姫』鈴木琢磨、イースト・プレス、2005
36. 『悪役レスラーは笑う』森達也、岩波書店、2005 [18]
37. 『自伝大木金太郎 伝説のパッチギ王』大木金太郎、講談社、2006 [7]
38. 『大山倍達正伝』小島一志、塚本佳子、新潮社、2006 [6]
39. 『親米と反米』吉見俊哉、岩波書店、2007 [5]
40. 『1976年のアントニオ猪木』柳澤健、文藝春秋、2007 [13]
- 補1 『スポーツを考える』多木浩二、筑摩書房、1995 [4]
- 補2 『総特集 プロレス(『現代思想』臨時増刊)』、青土社、2002 [12]
- 補3 『死の臨床格闘学』、香山リカ、青土社、2002 [3]
- 補4 『レスル・カルチャー』、岡井崇之編、風塵社、2010 [1]
- 補5 『大衆文化とメディア (叢書 現代のメディアとジャーナリズム4)』、吉見俊哉、土屋礼子編、ミネルヴァ書房 [3]

2. 上記1の質問で を記入した作品のうち、もっとも印象に残る作品の番号、あるいは記号を最大3つ挙げて下さい。また、その理由を簡潔に記入してください。

番(記)号	理 由
3. 『私、プロレスの味方です』 9名	<p>ああ、あんな風にプロレスを語ってもいいんだと思ったとともに、よくぞ書いてくれたと喝采しました。</p> <p>今までプロレスファンのみ対象だったが、この本は一般大衆も巻き込んだ第一号の本であると思うから。</p> <p>タイトルが全てを語っていると思います。当時はプロレスファンも自身にとって敵か味方かで分別していたように思います。最近、読み直してみました。やはり、あの当時に作家さんがこれを書き上げたということはセンセーショナルだと思えます。</p> <p>プロレスを演劇と捉える評論はユニークでした。</p> <p>大学生のときに読み、プロレスの味方がいるのだと勇気づけられた最初の本だから。</p> <p>従来の真剣勝負、八百長、スポーツ、ショー、単にそうした定義にしばられないプロレスの一面を示してくれた目からウロコの一冊だった。</p> <p>プロレスを見る眼に自信の無かった人も、この一冊で堂々と語れるようになった。</p> <p>誰かがいずれは書いたのかもしれないが、観客の立場にいる者に自分の目に見えるプロレス、自分が感じるプロレスを語ることに自由を与えた。</p>
32. 『流血の魔術』	<p>タイトルのあられのなさが印象深い。決してプロレスをおとしめる内容でもな</p>

<p>最強の演技』7名</p>	<p>かったと思う。          内容が衝撃的だった。          プロレスのショー的部分を全部知らしめたことにショックを受けた。          僕は否定しない派ですが、この本の中で語られていることも含めてプロレスが好きだと再認識しました。PART (最近出た)も読んだが、ミスター高橋の言い訳が多くて残念。          田中正志本を知っていた講談社のM氏が今までの氏の著作とは路線変更した衝撃的であり、未成熟なプロレスマニアを怒らした問題作。初期のプロレスインターネットで議論がとかく飛び交い、業界を取り巻く認識はアメリカよりは10年は遅れていると知らしめる結果に。          「暴露本」にショックと“やっぱり”という気持ちになったから。</p>
<p>36.『悪役レスラーは笑う』6名</p>	<p>グレート草津のバックドロップ失神の内容はまさにミステリアスそのもの。          プロレスのシナリオ性の部分を請け負った一人の悪役レスラー。その存在はともミステリアスであり、面白かった。          グレート東郷と言う対象そのものに力がある。記述の手法もプロレス的(?)          あの森さんがプロレスをテーマにしたことが印象に残っています。          するすると読めて面白かったのです。著者の興味の持ち方、疑問を明らかにする手順が面白い。          これはプロレスというものの奥深さを語る好著と思います。</p>
<p>40.『1976年のアントニオ猪木』6名</p>	<p>細かいところまでは覚えておりませんが、「力作」という印象でした。          私が大学1年生時代、いちばんプロレスにのめりこんでいた時代の真実?が分かり、よかった。          裏話という点ではいちばん面白かった。          あの内容なのに、文庫本版には猪木のインタビューが掲載されている。インタビューする方もする方だが、受ける方も受ける方だ。やっぱり猪木は、いい具合に狂っていると思った。          猪木、新日本プロレスの傾倒者として会場によく足を運んでいた頃にこの本を読んでいたらどんな心境になっていただろうかという恐怖の一冊。</p>
<p>17.『プロレス少女伝説』4名</p>	<p>物語で読みやすく、女子プロレス研究のための入門書のように読みました。          ノンフィクション作品として出色の出来栄。          女子プロレスに対する見方が変わった。          女子プロレスラーへのインタビューを通して「井田真木子」(こんなに前面に出てもよいのか!?とよい意味でショックを受けた。)が表現されている。</p>
<p>A『知的プロレス論のすすめ』3名</p>	<p>活字プロレスというジャンルに、別の視点から一石を投じたすばらしい著作です。          「村松本」を超える知と感性があることを示した。知をベースにした感性ではなく、感性をベースにした知だからこそ、今日の著者の「学」もしなやかでありつづける。</p>
<p>F『力道山』3名</p>	<p>等身大の力道山が透けて見えてきた所が一番でしょう。          とにかく力作、労作だと思います。</p>
<p>9.『世紀末文化考アントニオ猪木に関する倒錯的試論』2名</p>	<p>猪木がアンドレに勝つためにどうしたらいいか云々のあたりの倒錯ぶりに妙なリアリティを感じました。</p>
<p>10.『門茂男のザ・プロレス 力道山の真実』2名</p>	<p>当時の私には門氏の著作は衝撃的でした。文章は悪文でしたが。          リング外での力道山の実像(奢り、高ぶり及び苦悩)がよく書かれていて、非常に興味深かった。</p>
<p>11.『ケーフェイ』2名</p>	<p>自分でも驚くほど冷静に読める一冊だった。</p>
<p>13.『仕事師たちの哀歌(エレジー)』2名</p>	<p>獺さんにしか書けない話でしょう。読んで20年以上たちますが、今も覚えています。          内容はよく覚えていないが、夢枕獺氏の“プロレス愛”が伝わってくるから。</p>

14. 『お父さんのバックドロップ』 2名	プロレス/プロレスラーの泥くささ。ミスター・ヒトとの親交ある著者ならでは、か。 原作に感動し、映画も観に行った。主演の下田牛之助役の宇梶剛士の首が細くて、役に説得力が無かった。
B 『日本プロレス学宣言』 2名	プロレスを見始めたときに最初に手にした本です。 『別冊宝島』などのファンタジーあふれるプロレス本とは、まったく毛色の違うプロレス論だったから。
4. 『ファイター評伝アントニオ猪木』 1名	アントニオ猪木の成り立ちをかいま見ることができたような印象的な一冊だった。
6. 『馬場派プロレス宣言』 1名	猪木、新日本全盛のときにあえて馬場派の意見を書いた点に注目した。私個人的には村松友視よりはるかにレベルが高いと思った。
7. 『激突！馬場派VS猪木派』 1名	両派の意見が読めて単純に面白かった。全体的に猪木派はレベルが低いように思えた。
15. 『邪推するたのしみ』 1名	井上章一さんの視点の面白さ。
18. 『欲望のメディア』 1名	プロレスが現れた戦後の空気が伝わってくる。
20. 『プロレス社会学』 1名	プロレスを儀礼とするアプローチで勉強になり、博士論文にも引用しました。
30. 『女子プロレス民俗誌』 1名	女子プロレスのコスチュームを研究する上での必読書で3冊持っています！
補2 『総特集プロレス(『現代思想』臨時増刊)』 1名	プロレス史関係の論文が特に勉強になりました。
33. 『フレッド・ブラッシー自伝』 1名	昔のアメリカのプロレス興行形態がよくわかって面白かった。特に、古いレスラーの名前が多く出てくるので夢中で読みました。
8. 『力道山以前の力道山たち』 1名	
19. 『大学デビューのための哲学』	この著者も論理のベースにすぐれた感性がある。初めて読んだときには“やられた”と思ったが、それは真に快感であった。
23. 『巨怪伝 正力松太郎と影武者たちの一世紀』 1名	
E 『力道山と日本人』 1名	

3. ここに挙げた 51 冊以外で、もっとも印象に残るプロレス関連書物を一冊挙げ、その理由を簡潔に記入してください。

馳浩 『君はまだプロレスを知らない』 P H P 研究所、1996、2名	山本小鉄さんの解説に匹敵する名著と存じます。 当事者の著書なので「言えないこと」もあるのですが、生命保険の話など、日本のプロレス本では、プロレスラーの生々しい部分を描いた先駆的な一冊として重要だと思います。
中島らも 『クマと闘ったヒト』 メディアファクトリー、2000、2名	とにかく面白い。ウソかホントかわからない話を居酒屋できいている気がして笑いました。 ミスター・ヒトという知名度がほぼゼロに等しいモノにスポットをあて、深い裏の話が話されている。
東京スポーツ新聞社編 『プロレス名	国内編の興奮生々しい馬場対ドリ－NWA世界戦(初対決)、海外編のブルーザー、ボブ・エリス、オコーナー、バディ・ロジャース世界戦など興味深い内

勝負物語』東京スポーツ新聞社出版局、1970	容満載でなけなしの小遣いをはたいて買った甲斐があった。中学校の学級文庫にそって置いていたら担任教師に「だれがこんなくだらん本を置いたんや！」と取り上げられた因縁の一冊。
アントニオ猪木『燃えよ闘魂』東京スポーツ新聞社出版局、1977年	父と小学生の頃、ゴールデンタイムでプロレスを見ており、八ガキで応募して当選した本だから。よくプロレスごっこを親子でして、猪木のマネを自分がしていた（紙でチャンピオンベルトまで作っていた!!）。
ザ・グレート・カブキ『ザ・G（グレート）・カブキ自伝 星条旗を毒霧で染める』リイド社、1984	日本のプロレスブーム（の、一つの末期）をリングの内側から、そして日本の外側からながめることができる。語り口もよく、エピソードも豊かで、まず読み物としておもしろい。レスラー自伝は他にもおもしろいものが多い!!
梶原一騎『反逆世代への遺言』ワニブックス、1984年	日本を代表するスポ根作家が、プロレス興行との関わり、さらには猪木対ウイリーのシナリオを書いていたことまで激白。それでいて猪木を貶めていないプロのエッセイ。
門茂男『門茂男のザ・プロレス 群狼たちの真実』角川書店、1985	昔の日本のプロレスの裏話が盛りだくさんで面白かった。
山本隆司『ザッツ・レスラー』ベースボール・マガジン社、1988	高校時代、ターザンに洗脳されていた苦い過去を思い出すから。
松浪健四郎『古代宗教とスポーツ文化』ベースボール・マガジン社、1989	プロレスをどう位置づけるか考えさせられました。
桐野夏生『ファイアボール・ブルース』（1）（2）文春文庫、1998、2001	「女にも荒ぶる心があることをわかってほしくて、この小説を書いた」という著者自らの言葉が印象的だった。
宮崎学『不逞者』幻冬舎、1999年	プロレス関係書とはいえないのですが、女子プロレス興行と万年東一の関係が取り上げられていたので。万年東一という人物がどのような人物であったのか、知りあぐねている時に会った本でした。
アントニオ猪木『猪木詩集「馬鹿になれ」』門角川書店、2000年	良くも悪くも猪木らしさを味わえる。書名と同名の作品は「本当の自分も笑ってた… / それくらい / 馬鹿になれ」
松原隆一郎『思考する格闘技』廣済堂出版、2002	プロレスをどう位置づけるか考えさせられました。
金子達仁『泣き虫』幻冬舎、2003	ミスター高橋の本がレフェリーの暴露本なら、この本はレスラーからのものであり、高田の人間性がよくわかった。そんな本を書いてもプロレス界、格闘技界に生き残る高田はスゴイ。
小島和宏『ぼくの週プロ青春期』白夜書房、2008	女子プロレスとメディアの関係についての言及。
関川哲夫『ある極	ープロレスラーのドラマチックな人生を、プロレスの仕組みについてもこれほ

悪レスラーの懺悔』講談社、2009	ど詳細に記した書物はない(ゴーストライターが代筆したものではなく、作家関川哲夫が自ら著した画期的な本である)。
金沢克彦『子殺し猪木と新日本プロレスの10年戦争』宝島社、2009	リング外のドラマが面白い。リング内よりも面白いのは皮肉めいていますが。
宝島社のMOOK女子プロレス特集(タイトル失念)	選手と団体の関係が今のAKB48と同じような気がします。
ここ数年の別冊宝島ノンフィクションシリーズ	ここまであからさまにプロレス裏事情を出していいものか、とも思いましたが、読んでいるうちに、ここまで知っていることを前提とした楽しみ方もありなのか、と思い始めました。